



MAR. 2020
ISSUE NO. 40

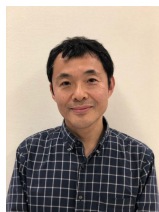
こだちNews

特定非営利活動法人 九州大学こころとそだちの相談室

<https://www.codachi.org>



巻頭言-1



回復へのヒントとしての感覚過敏

NPO法人 リトルプロフェッサーズ 代表
片岡 聡

私が社会に参加した1990年頃は、私のようなASDの困難が大きい者でも雇用労働につくことができ、今日ほど成人の発達障害の概念が必要な日本ではなかった気がします。その後、フラッシュバックを統合失調症と誤診されたのを契機に、多くの向精神薬を服用することになります。そして薬物療法が始まってから、感覚過敏や身体症状はむしろ深刻になりました。結局、仕事もやめざるを得なくなり、人生について悩んでいた頃、診断がASDに見直されました。それを機に私は再び雇用労働に就くことを諦め、ASDの子もたちの身体的困難や行動上の問題につて、啓発や助言を行う法人を立ち上げました。この仕事は自分にとって大変やりがいがあり、現在に至るまで続いています。

しかし、人と接することが多くなるにつれ、一度は比較的落ち着いていた、身体症状や感覚過敏に再び悩まされることになります。すでに私には再び薬物療法に戻る選択肢はなく、人生の再生をかけて取り組んだのが徹底的な食事の見直しを中心とした生活習慣の改善でした。これは劇的な効果があり、常態化していた不眠や下痢が一掃されるとともに、感覚ストレスに対する耐性も大きくなり、周囲の支援者からは、私の感覚過敏が改善したように見えています。

この経験を経て私は「不摂生に対する耐性の差」がASDと診断される人の中にも存在し、ASDの人たちの社会適応を決める大きな要因の一つであると思うようになりました。グルテン含有食品、携帯端末由来の電磁波、植物油、食品添加物等にいくらさらされても、如何なる健康影響も自覚しないの方が圧倒的多数派です。しかし、これらを徹底的に避けることで、劇的に身体的二次障害が改善する私のようなASD者が多く存在することもまた事実です。そして感覚過敏は、後者にとって生きるために必要な食べ物や、住んでよい環境を決定する上で必要不可欠なものと考えられるようになりました。

まだ準備不足な私は「ASDという少数派の中のさらに少数派」の問題という提起にとどめておきますが、発達障害の枠を超えて、現代の子もたちの食や環境由来の身体的困難を考える上で、とても重要な示唆が含まれる気がします。

目次

市民向け講座のご報告	-3
研修会のご報告	-4
講演会のご案内	-5

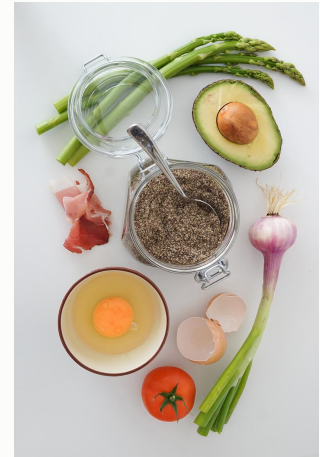
社会と暮らしとASD

NPO法人 リトルプロフェッサーズ
菊地 啓子



私を含めASDと生きる人間は本能的な人が多い。本能的とは「目に見えない環境の変化」に敏感、世代を超えて人類が生き残っていくために必要不可欠なセンサーが正常機能しているとも言える。感覚過敏とは、生存環境の悪化や条件の良し悪しを察知・判断する本能的センサーが、本人の意図とは関係なく本人を守っているだけではないか。このセンサーの機能停止が原因で、多くの人に根拠のない、安心安全感が成り立ってしまっているだけではないかと今の私には思える。

発達障害という枠組みでの配慮が必要になったのは、ごく最近だ。ごく一部の敏感な人間、ASD者の生存環境認識センサーが、生存本能がフルアラートになるほど、生存環境が悪化しているということではないだろうか。和食、発酵食品、着物の質感など、もともと日本には本能的かつ繊細なセンサーを健康に生活に「実用活用する文化」があった。その中で感覚過敏と呼ばれるものは才能でしかなかっただろう。環境変化を捉えるセンサーが鈍い、退化した人が増え、多数派として優遇することが成り行きとなり、また権威としての科学・化学を盲信する人たちが増え続ける中で、生存本能的絶対センサーによって、無意識に生存可能空間を選ばざるを得ないASD者は、「大変生きづらい」。



そのセンサーが同じASD者の中でも繊細すぎると言われ続けた私は、社会適応努力をすればするほど、ASD由来と思われる「言葉では説明不能の困難」、「感覚の鋭敏さや特異性による困難」で、ごく最近まで大変苦しんだ。そのために多様な科の医師たちと、症状の緩和や治療方針について議論し続け、その結果、ある程度は各医療関係者と対等に話せるようになってしまった程だ。ときに専門家であるはずの医師を言いくるめてしまうこともあるほど、身体感覚と個体の生存について語る人間に「いつの間にか」なっていた。

「いのちの専門家」として生計を立てる彼らが、手も足も出なかった私の「あまりにも変化し続ける多様な症状」「診断基準、ガイドラインにない症状」。これらの問題解決は、一度気がつけば実は容易かった。繊細な自分自身の内部感覚を虐げないよう厳格に注意、尊重することを徹底しただけだからだ。ただ、親の管理下にあった私はそれに気づくことが、そしてそれを主張しても尊重することが一切許されて来なかった。親は感覚が鈍く、平気だったからだ。

だが、自分の回復を完全自己努力で成し遂げ、家族や友人の回復をも支える生活を送る今となっては、「ASDは実は障害ではなく、激しく変化する生存環境下での生命の確保に欠かせない圧倒的な優位性」としか思えない。

日々、口に入れるものの管理は他人には任せられない。

これは経済レベルやI.Q.の如何にかかわらず、全ての人間、人間どころか全ての動物が皆そうだ。

にもかかわらず、現代人は完璧、完全なる医学、科学信仰に心理的かつ緊急事態の対応を任せっきりにできると思い込んでいるかのようだ。

それは新興宗教の過剰な崇拜の如く甚だしく、頑なであるように私には見える。

以前の自分自身がそうであったように。

市民向け講座のご報告

発達障害の二次障害と回復～生きづらさの本質と支え・・・・・・・・・・

2019年10月23日(日)に、NPO法人リトルプロフェッサーズ代表の片岡聡様をお招きし、「市民向け講座 発達障害の二次障害と回復」と題して、黒木俊秀先生（九州大学教授）との特別対談を開催しました。また、リトルプロフェッサーズのスタッフである、菊地啓子様にもご登壇いただきました。

当講座は当初、参加者150名を予定しておりましたが、予想を上回る数のお申し込みをいただき、10代から70代まで幅広い年代の方、計200名の方にご参加いただきました。ご参加いただいた方々の中には、当事者の方の実体験など生の声が聴きたいため参加したという方が多くいらっしゃいました。



前半は、発達障害当事者である片岡様から、ご自身の生き立ちや事例を通して感覚過敏・身体症状からの回復について語られ、精神科医である黒木俊秀先生からは、自閉症スペクトラム障害(ASD)に対する薬物療法とその課題点や、併発しやすい身体疾患についてのお話いただきました。

その後、お二人がそれぞれの立場から“発達障害とは何か”や“二次障害からの回復”などをテーマに対談形式で内容を深めていきました。

後半は、菊地様より前半の話題をまとめていただいたものを会場と共有しつつ、参加者の方からの質問内容に3名がそれぞれの立場から答えるという形で会が進行されました。当事者の方からの話を聞くことで、支援者の方は目から鱗が落ちるような感覚や、これまで感覚的に理解して支援していたことに対して支持された点や、改めなければならない点など気づきを得られたことが多くあったようです。

参加者の感想には、「発達障害にとって二次障害とは何なのか今一度考えるより良い機会になりました」「専門の先生と当事者が同じ壇上でご講演されるというなかなかない設定で大変意義深かったです」「脳や心の病気というイメージがあったが、身体疾患を併存しやすいという点に驚いた」「当事者の大人が楽しく生き生きと過ごしているということが大切だということも印象的でした」「当事者のお二人のお話が色々やってみようと思える気持ちになりました」といったものが多く、参加者の皆様の満足度も高いものとなりました。

本ニュースレター巻頭に、片岡聡様、菊地啓子様よりそれぞれ寄稿いただいておりますので、そちらもぜひご覧ください。



片岡 聡（かたおか さとし）

1966年、新潟県生まれ。東京大学薬学部卒。博士(臨床薬学)。大学卒業後、研究機関・企業等で医療系のITの実務と研究に従事。自閉症の二次障害のため、雇用労働者として生きることを諦め、NPO法人リトルプロフェッサーズを設立。同代表。

菊地 啓子（きくち けいこ）

NPO法人リトルプロフェッサーズスタッフ。
アスペルガー症候群・高機能自閉症女性の会カモミール代表を兼任。専門はASDピアカウンセリング。

NPO法人 リトルプロフェッサーズ

自閉症、アスペルガー症候群、特定不能の広汎性発達障害などの自閉症スペクトラム障害(ASD)をもつ者の感覚過敏等の身体的困難の研究、ASD児の認知に即した学習指導方法・教材開発の研究、ASD児・者に最適な余暇支援の研究を行う。

さらにこれらの研究成果を広く一般市民を対象に公開し、ASD児・者の抱える生きづらさの軽減、健康の増進、学習能力の向上、余暇の充実に資するとともに、健常者とASD児・者の共生社会の創設に寄与することを目的とする。

思春期のふしぎ～反抗する子・行きしぶる子・話さない子～

2019年11月17日(日)に、一般の方向けの初企画の講演会として、講師に大場信恵先生（九州大学教授）をお招きし、「思春期のふしぎー反抗する子・行きしぶる子・話さない子ー」を開催しました。本講演会は、思春期の難しさや近年の特徴的な対人関係のあり方、その理解の仕方を学び、思春期の子どもとの関わりのヒントを得ることを目的としました。約100名の方にご参加いただき、大変満足度の高い講演会となりました。



当日には、RKB毎日放送のニュースでも放送していただきました。思春期のお子さんを持つ保護者の方だけでなく、一般の方向けにどのような話をするとうまいか、内容や伝え方を学ぶ目的で参加された専門家もおられたようです。



前半は講義形式で行い、反抗期は自立するための儀式であること、頭と心の違い、見守ることの大切さと難しさ、共感することや認めることの重要性などについて、具体例を交え、理解するためのキーワードをあげてお話されました。専門用語を使わずに一般の方に届く言葉でわかりやすく伝えておられるのが印象的で、会場では頷きながらメモを取る方も多く見られました。

後半は、事前にお伺いした質問に答えるという形で不登校のお子さんへの対応やゲームをどう考えるか、いじめへの対応について講義でのキーワードを交えてお話いただきました。

参加者の感想には、「事例や日常でありうる事例をもとに話を下さってとてもわかりやすかったです」「見守ることの大切さを再認識することができました」「子どもとの具体的な関わり方、心に届くためにできることを教えてもらったことがとてもありがたかったです」「早速チャレンジしてみたいと思います」といったものが多く見られました。質問は多岐にわたり、時間内に取り上げることができなかったものもありましたので、今後の一般の方向けの講演会での企画につなげたいと思います。

（本講演会は福岡市NPO活動推進補助金事業にご支援いただき開催されました。）

研修会のご報告



事例で学ぶテストバッテリー

「事例で学ぶテストバッテリー」研修会の2回目を2020年1月26日(日)に開催しました。今回も1回目引き続き、定員満員での実施となりました。講師に高橋靖恵先生、中園照美先生、司会に姫島源太郎先生、事例提供に山辺麻紀先生をお迎えし、丸一日かけてじっくりと事例検討を行いました。

事例では投影法のロールシャッハ検査、風景構成法、バウムテスト等を通してケースの理解を深め今後の支援を検討しました。また今回は、事例検討の進行方法について講師の先生方が工夫を加えてくださり、各受講者があたかも自分が担当者としてクライアントと向かい合っているかのように、面接過程を追体験しながら一緒に考えていくことができました。各検査から見えるクライアントの姿が次第に繋がり統合されていく過程が共有され、大変貴重な研修会になりました。

さて、毎年大好評でリピーターも多い本研修は、既に次年度の2回開催も決定しております。次年度は第1回2020年6月21日(日)、第2回2021年2月7日(日)です。3月下旬頃より募集を開始予定ですので、お早めにお申し込みください。

講演会のご案内

第14回 定時総会特別企画 田中 康雄 先生 講演会

日時：2020年5月17日(日)

会場：九州大学西新プラザ 大会議室

講師：田中 康雄 先生（こころとそだちのクリニック むすびめ）



各種研修会情報
～随時更新中～



発達障害のある子どもとその家族への支援、社会との橋渡しの第一線でご活躍の田中先生のご講演が実現しました。

皆様のご参加をお待ちしております。



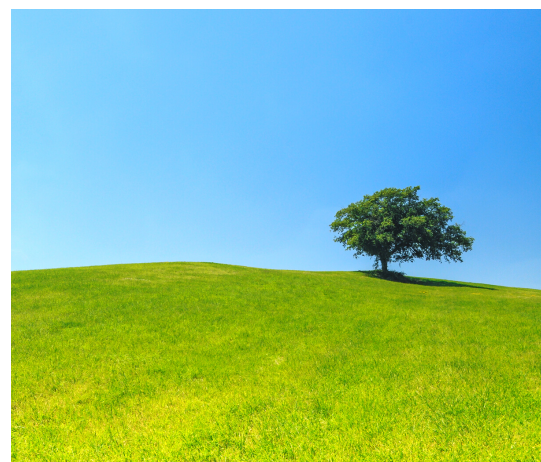
入会のご案内

こだちは今年で14年目を迎えます。地域に定着した心理臨床サービスを継続するには、収支の安定が求められます。NPO法人の会員となって、私たちの活動を支援いただけると幸いです。会員になっていただける方はぜひ、こだちまでご連絡ください。なお、会費は1年毎の更新制です。よろしくお願いいたします。

会員(ひと口5,000円)：臨床心理士・公認心理師(予定)・医師
その他対人援助に関わる方(定款参照)

学生会員(ひと口1,000円)：学部生・大学院修士課程

賛助会員(個人：ひと口5,000円・団体：ひと口10,000円)



ご支援のお願い

当NPO法人では、会員以外の方からも、ご寄付をお待ちしております。関心や興味を持たれた方は、ぜひご連絡ください。

交通のご案内



〒814-0002
福岡市早良区西新2-16-23
九州大学西新プラザ 産学交流棟
TEL / 092-832-1345
FAX / 092-832-1346

地下鉄でお越しの方

福岡市営地下鉄空港線 西新駅下車後
7番出口より徒歩にて約10分

バスでお越しの方

西鉄バス「西新一丁目」または「今川橋」下車後
徒歩にて約10分

FOR MORE INFORMATION
最新情報配信中



九州大学 こだち

